

幼稚園児の頃、泥棒が怖くてたまらなかった時期があります。夜寝る前には、必ず戸締りのチェックをする“鍵っ子”になり、親が隣でいびきをかいていようものなら、「この家を守るのは自分しかいない」とただならぬ緊張感を持って、目を覚ましていたように思います。しかし、今となってはその緊張感はどこへやら…いつの間にか、泥棒に対する危機感が他人事になってしまっています。

本日の聖書箇所、イエスは泥棒への備えをするように、「人の子（救い主の呼称）」が思いがけない時に来ることに對して、心備えをしないでいなさいと促しています。そして当時、その「人の子」が来た時には、救われる者と滅びる者とが峻別されるような裁きがあると考えられていました。こう言う話は、何だか古臭い、うさん臭い話として敬遠されがちですが、日本人が「自分は天国行きだ、地獄行きだ」などと口にする感覚と似ています。要するに、今まで誰かのせいにしたり、ごまかしてきたりしたけれど、いつかは今の自分が厳しく問われる時が来る、そういう「来るべき時」に対する潜在的な緊張感や畏れのことです。しかしイエスは、そのような「来るべき時」への心備えが、「食べたり、飲んだり…」（38節）、畑仕事や家事（40～41節）といった日常生活に忙しくしている中で、いつの間にか、他人事のようになっていることを危惧しています。なぜなら、ありのままの自分が厳しく問われる時というのは、想像以上の絶望をもたらすからです。見る景色すべてが色あせ、「太陽は暗くなり、月は光を放た」（29節）なくなるような悲しみに侵食される情景をイエスは思い描いています。実際、そのような絶望のなかで、自死に至ったイエスの弟子ユダの姿が27章には記されています。イエスを裏切ってしまった自分自身への絶望からです。

「人の子」とはイエスを指し示しています。イエスの十字架死は、「一生ついて行きます」と豪語しながらも、それを貫き通せた弟子が一人もいなかった事実を露呈しました。そうして彼らは、「人の子」イエスの十字架を前に厳しく裁かれ、心を丸裸にされ、自分自身に対して絶望していったのです。しかしその時、彼らは「私は世の終わりまで、いつもあなたがと共にいる」（28:20）とのイエスの赦しの言葉を聞いて、新たに生きる道へと押し出されていきました。自分自身が厳しく問われ、自分が嫌でたまらなくなる「来るべき時」に備えて、そんな私たちを必要とし、愛してやまない主イエスの言葉に「目を覚まして」（42節）いる者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

